

D-3

移動表現における着点の有無：通言語的実験研究

江口清子（宮崎大学）・吉成祐子（岐阜大学）・眞野美穂（鳴門教育大学）・
アンナ・ボルジロフスカヤ（立教大学）・松本曜（国立国語研究所／神戸大学）

1. はじめに

本研究では、描写する移動事象において、移動物が着点に到達するか否かによって、言語表現にどのような差異が生じるのかを通言語的に考察する。移動表現に関する研究では、移動事象に関わる諸概念（経路、様態）をどの言語形式で表すのかによって言語類型が提唱されてきた（Talmy, 1985, 2000; Slobin, 2000 他）。これらの類型論に基づいて各言語での表現パターンを詳細に分析する研究や、複数言語間での比較を行う研究が数多くなされている。先行研究において、移動物が着点に到達するか否かによって、異なる移動表現の類型タイプが許される言語が存在することが主張されてきた。例えば、経路主要部表示型言語¹であるスペイン語において、到達有の事象では、主要部動詞（以下、主動詞）として、(1a) のように経路動詞が使われるが、到達無の事象の場合には、(1b) のように様態動詞が使われるという指摘がある（Aske, 1989）。

- (1) a. *Juan subió a/hasta la cima en dos horas.*
 Juan go.up.PST to/up.to the top in two hours
 Path Path
 “Juan went up to the top in two hours.”
- b. *Juan caminó hasta la cima (?* en dos horas).*
 Juan walk.PST up.to the top in two hours²
 Manner Path
 “Juan walked up to the top (?* in two hours).”
- (Aske 1989:7³)

また経路主要部外表示型言語で、着点への到達の有無によって経路表現の選択が異なる言語がある。例えばハンガリー語では、到達有の事象の表現において動詞接頭辞が使われ、到達無の事象の表現においては使われない傾向にある（Eguchi & Bordilovskaya, 2017）。

- (2) a. *A fiú be-fut-ott a szobá-ba.*
 the boy.NOM into-run-PST the room-ILL
 Path-Manner Path
 “The boy ran into the room.”
- b. *A fiú a szobá-ba fut-ott.*
 the boy.NOM the room-ILL run-PST
 Path Manner
 “The boy was running into the room.”

しかし、先行研究において、この、着点への到達の有無による表現の差異については、諸言語を対照し、検討するような包括的な研究は行われてこなかった。そこで、本研究では、系統と類型の異なる五つの言語（イタリア語・日本語・英語・ロシア語・ハンガリー語）の母語話者を対象として映像を用いた実験調査を行い、そのデータに基づき考察する。

¹ 移動表現の研究において、移動の経路に着目した Talmy の類型論（1985, 2000 他）に基づく「V 言語（Verb-framed language）」「S 言語（Satellite-framed language）」という用語がよく知られている。しかし、Matsumoto (2003 [2011]) で主張されるように、Talmy が指す「動詞」とは、文の主要部としての動詞（＝主動詞）であるため、松本（2017）

² 本発表で使用される略号は以下の通りである。なお、グロスでは形態素境界をハイフン「-」で、同一形態素内に複数の文法要素が含まれる場合にはピリオド「.」で示す。ACC: accusative/対格, ALL: allative/ 向格, DET: determined/ 定動詞, F: feminine/女性, ILL: illative/入格, M: masculine/男性, NOM: nominative/主格, NonDET: non-determined/ 不定動詞, PST: past tense/過去, RP: reflexive pronoun/再帰代名詞, SG: singular/単数

³ グロスと対訳は発表者による。

2. 移動表現の類型と各言語の特徴

2.1 経路主要部表示型言語と経路主要部街表示型言語

本研究で対象とする言語の中で、イタリア語、日本語は経路主要部表示型言語、英語、ロシア語、ハンガリー語は経路主要部外表示型言語に分類される。経路主要部表示型言語のイタリア語、日本語では、経路概念は通常、主動詞 ((3a) では *entrato*、(3b) では複合動詞の後項動詞「込む」) で表現され、様態がそれ以外の要素 ((3a) ではいわゆるジェルンディオ *correndo*、(3b) では複合動詞の前項動詞「駆け」) で表現される。特に日本語では、ダイクシスが主動詞で表現される傾向が顕著である (Koga, Koloslova, Mizuno, & Aoki, 2008; 吉成, 2014)。

- (3) a. *Il ragazzo è entrato nella camera correndo.* (イタリア語)
 the boy be enter.PST into.the room running
 Path Path Manner
 “The boy ran into the room.”
 b. 男の子が 部屋の 中に 駆け-込んだ。 (日本語)
 Path Manner-Path

また、Talmy の一連の研究では、経路が文中に 1 カ所で表されることを前提としているが、実際には同一文中で複数の形式によって表現されることがあり (Sinha & Kuteva, 1995)、イタリア語の前置詞 *nella* (3a)、日本語の位置名詞+格助詞「中に」(3b) のように、経路主要部表示型言語にも当てはまる。

それに対し、経路主要部外表示型言語の英語、ロシア語、ハンガリー語では主要部外の要素 ((4a) では前置詞 *into*、(4b) では接頭辞 *v-* および前置詞 *v*、(2a) では動詞接頭辞 *be-* および格接辞 *-ba*) で表現され、様態が主動詞 ((4a) では *run*、(4b) では *bež-al*、(2a) では *fut*) で表現される。

- (4) a. The boy ran into the room. (英語)
 Manner Path
 b. *Paren' v-bežal v komnat-u.* (ロシア語)
 guy in-run.DET.PST.3SG.M into room.SG-ACC
 Path-Manner Path
 “The boy has run into the room.”

この三つの言語は同じ経路主要部外表示言語と言っても違いがある。まず、ロシア語にはダイクシス動詞が存在しない。英語、ハンガリー語にはそれが存在し、特にハンガリー語では、様態を指定しない場合、主動詞としてダイクシス動詞が使われる (江口, 2017)。また、ロシア語、ハンガリー語は(動詞) 接頭辞と前置詞あるいは格接辞の 2 ヶ所で経路が表されるが、英語は前置詞のみで表される。

表 1. 各言語の主な経路表現位置

	イタリア語	日本語	英語	ロシア語	ハンガリー語
主動詞	✓	✓	-	-	-
(動詞) 接頭辞	-	-	-	✓	✓
前置詞/格	✓	✓	✓	✓	✓

2.2 テンス・アスペクトの表出方法と形態・統語的特徴

イタリア語はテンス・アスペクトに関して非常に豊かな体系を持つ言語であり、形態としては、動詞の語形変化や、助動詞と動詞の語形変化の組み合わせによって表される。例えば、客観的な過去の事実を表すのに、助動詞として *essere* ‘be’ あるいは *avere* ‘have’ の現在形と動詞の過去分詞形の組み合わせを用いる。日本語はテンスを助動詞の「る」(非過去) と「た」(過去) で区別し、補助動詞「てい(る)」や「てしまう」を付加することで異なるアスペクトを表現する。英語は動詞に屈折接辞 *-ed* を付加することで過去を表し、*be* 動詞と現在分詞、*have* と過去分詞の組み合わせのような迂言的な手段で異なるアスペクトを表現する。ハンガリー語は英語同様、屈折接辞の付加によって過去を表し、動詞接頭辞の付加によって異なるアスペクトを表現する。ロシア語の移動動詞には、基体動詞に定動詞-不定動詞の対立があり、それぞれに過去形と現在形が存在する。さらに、接頭辞の付加によって完了体-不完了体の対をなすという、非常に複雑な体系を持つ。

2.3 研究課題

以上のように、移動表現の類型的にも、テンス・アスペクトの表出方法にもそれぞれ異なるのある五つの言語について実験調査を行った上で、特に以下2点を研究課題とし、実際の言語使用において通言語的にどのような特徴が見られるのかを明らかにする。

- 1) 移動事象が着点に到達するものか到達しないものかにより、移動表現の類型的パターンが変化するか。つまり、経路主要部表示型言語で、Aske (1989) らが主張するように、着点に到達しない事象において主要部で様態動詞が使われる傾向が見られるのか。
- 2) 移動事象における着点の有無が、どのような表現形式（接置詞、動詞接辞、テンス・アスペクトマーカ）の選択と関わるのか。

なお、移動の言語表現は描写する移動事象のダイクシスによって異なるパターンが選ばれることが知られており（松本, 2017）、本研究においても、異なるダイクシスを持った移動事象を比較検討する。

3. 調査方法

本研究で分析に使用するデータは、国立国語研究所の共同研究プロジェクト『空間移動表現の類型論と日本語：ダイクシスに焦点を当てた通言語的実験研究』（代表：松本曜）で作成されたビデオ映像（各2～8秒）を用いて収集されたものである。映像は、移動の経路、ダイクシスおよび様態等を組み合わせた全52場面で、実験参加者によって口頭で描写された。実験参加者は五つのグループに分けられる。イタリア語母語話者15名（担当：吉成・アンドレアーニ）、日本語母語話者22名（担当：吉成・古賀）、英語母語話者23名（担当：秋田・松本・眞野）、ロシア語母語話者20名（担当：ボルジロフスカヤ）、ハンガリー語母語話者15名（担当：江口）である。録音されたデータは実験者が文字化し、一定の基準に従ってコーディングした。コーディングでは各概念の言及率と言語形式に着目している。

分析の対象とした場面は、着点に到達するものとししないもので、それぞれ三つのダイクシス（/TOWARD the Speaker (TWD S)/, /AWAY FROM the Speaker (AWYFRM S)/, /NEUTRAL (NEU)/）との組み合わせによって構成された6場面である。着点に到達する場面として用いた映像は、人が目標物（自転車もしくは話者）の所まで歩いて移動し、そこに到達するというもの、着点に到達しない場面として用いた映像は、人が移動しているが着点は映っておらず、移動の途中で映像が終わるものである。

4. 結果と考察

4.1 主動詞の種類

分析の結果、経路主要部表示型である日本語とイタリア語では、動詞選択において差が見られた。イタリア語では、全体的な傾向として、着点に到達する場面（到達有場面）では主動詞でダイクシス動詞が使われることが多く、着点に到達しない場面（到達無場面）では様態動詞の使用が多かった。ただし、図1が示すとおり、ダイクシスの違いにより、到達有無での動詞選択の特徴が異なる。

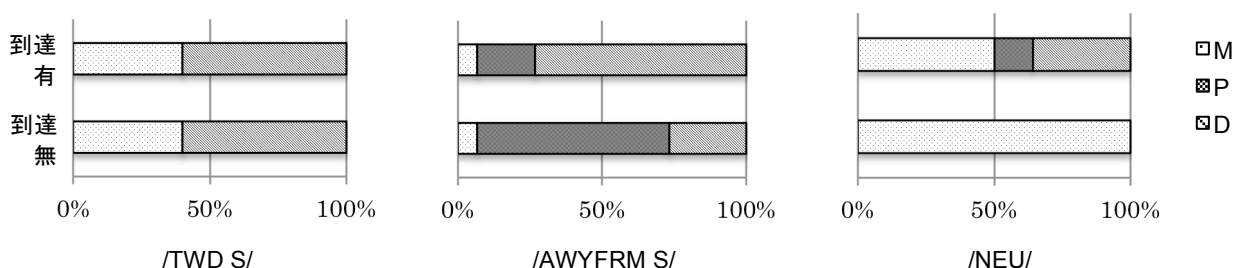


図1. イタリア語の主動詞に占める各概念の割合（ダイクシス別）

/TWD S/ の場面ではあまり差は見られず、ダイクシス動詞 *venire* ‘come’ が使われる比率が多い。到達無場面で主動詞として様態動詞が使われる傾向は、/NEU/ の場面に顕著で、到達有場面ではダイクシス動詞 *andare* ‘go’ が前置詞句と共に使われるが、到達無場面では圧倒的に様態動詞が使われる。/AWYFRM S/ の場面では、到達有場面ではダイクシス動詞 *andare* ‘go’ が前置詞句と共に使われる (5a) が、着点に到達無場面では経路を表す再帰動詞 *allontanarsi* ‘leave’ が使われる (5b) 傾向にある。

- (5) a. *La ragazza va verso la bicicletta.* (イタリア語)
 the girl go.3SG toward the bicycle
 Deixis Path
- “The girl goes to the bicycle.”
- b. *La ragazza si allontana (da me).*
 the girl RP.3SG leave from me
 Path Deixis
- “The girl leaves from me.”

日本語では、どちらの場面でも主動詞ではほとんどの場合ダイクシス動詞が使われる（到達有場面で 98.5%、到達無場面で 90.9%）ため、複雑述語の前項を観察する。到達有場面では「歩いて（行った）」のように様態動詞が使われ（80.3%）、到達無場面では、/AWYFRM S/ で「去って（行った）」（27.3%）や、/NEU/ で「通り過ぎて（行った）」（27.3%）のように経路動詞が使われる例も見られた。到達無場面で「道を歩いていた」のように様態動詞を主動詞とする例は、予測に反して、/NEU/ 場面で若干（22.7%）見られたただけだった。

- (6) a. 友人が 自転車の 方に 歩いて 行った。
 Path Manner Deixis
- b. 友人が 通り-過ぎて 行った。
 Path-Path Deixis

一方、経路主要部外表示型である英語、ロシア語、ハンガリー語では、ダイクシスの種類に関わらず、到達有場面と到達無場面とで、動詞の選択に大きな差は見られなかった。いずれの場面でも、経路は前置詞や接頭辞等の主要部外要素で表される。図 2 から分かるように、英語、ロシア語では主動詞はほぼ常に様態動詞であり、ハンガリー語では、図 3 が示すように、様態動詞あるいはダイクシス動詞が使われている。/TWD S/ と /AWYFRM S/ の場面ではダイクシス動詞が少なくとも 4 割は使われるが、/NEU/ 場面では様態動詞の使用が圧倒的である。これに関しては、到達有場面と到達無場面とで違いがない。

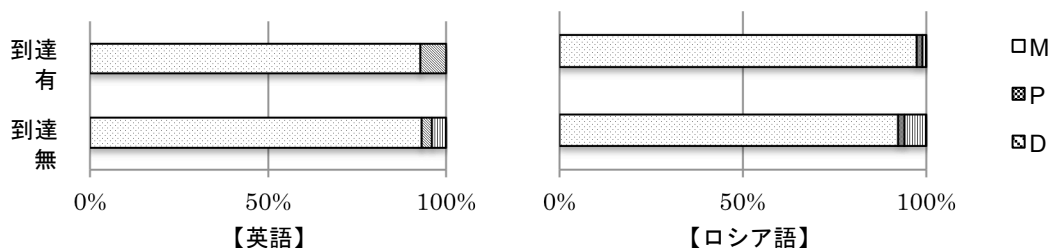


図 2. 英語・ロシア語の主動詞に占める各概念の割合

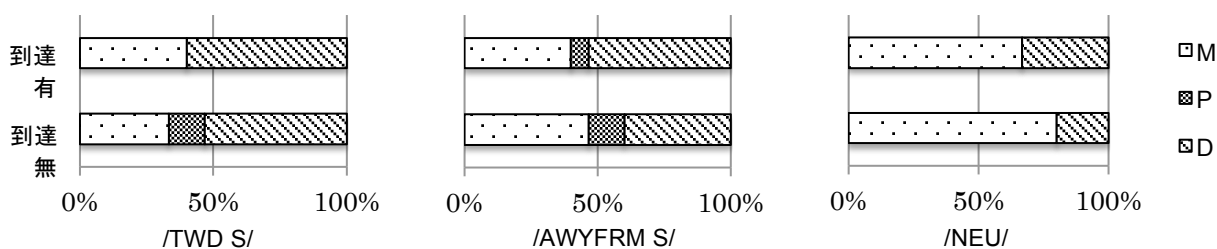


図 3. ハンガリー語の主動詞に占める各概念の割合（ダイクシス別）

4.2 接置詞および格の選択

接置詞および格の違いは、本研究で行った調査では、ハンガリー語でしか見られなかった。まず、ロシア語の前置詞には TO と TOWARD の区別がもともと存在しない。イタリア語、日本語、英語では接置詞の区別があるにも関わらず、/TWD S/ 場面で比較すると、大きな違いは見られなかった（表 3）。この事実は、外界の事象において着点への到達があっても、それを telic な事象だと認識して言語表現を選択するとは限らないことを示唆している。

表 2. /TWD S/ 場面でのイタリア語・英語の各前置詞の使用回数および割合

	イタリア語 (15 回答中)		日本語 (22 回答中)		英語 (23 回答中)	
	<i>mi</i> 'to me'	<i>verso di me</i> 'toward me'	「私のところに」 など ⁴	「私の方に」 など	<i>to me</i>	<i>towards me</i>
到達有場面	4 (26.7%)	11 (73.3%)	3 (13.0%)	13 (56.5%)	10 (45.5%)	13 (59.0%)
到達無場面	0 (0%)	12 (80.0%)	3 (13.0%)	10 (43.5%)	5 (22.7%)	17 (77.3%)

他方、ハンガリー語では、*hozzám* 'to me' と *felém* 'toward me' に明確な使い分けが見られた。到達有場面では *hozzám* が 11 例、*felém* が 3 例なのに対し、到達無場面では *hozzám* が 4 例、*felém* が 10 例と逆転していた。

4.3 テンスとアスペクト

次に、主動詞のテンスとアスペクトに着目し、考察する。まずイタリア語では、テンス・アスペクトにはさほど違いが見られず、いずれの場面においても現在形が使われる割合が高かった（到達有場面で 73.3%、到達無場面で 71.1%）。日本語も動詞のテンス・アスペクトには違いが見られず、到達無の /NEU/ 場面でテイル形の使用が若干見られるものの、いずれの場面においてもタ形の使用が圧倒的であった（到達有場面で 100%、到達無場面で 81.8%）。

これに対し、英語では、有意差はないものの、テンス・アスペクトに違いが見られた。いずれの場面でも現在形と過去形の使用が多かった（到達有場面で、現在形 39.1%：過去形 53.6%、到達無場面で、現在形 31.9%：過去形 46.4%）が、到達有場面では現在進行形の使用も 18.8%見られた。ロシア語では過去形か現在形かでは大きな違いが見られなかったが、一部の場面で、定動詞／不定動詞の使用に差が見られた。/TWD S/ 場面で比較すると、到達有場面では定動詞の現在形 *idiot* の使用が最も多かったが、到達無場面では不定動詞の現在形の使用が多かった。

- (7) a. *Devushka* *idiot* *ko mne.* (ロシア語：到達有 /TWD S/)
 girl walk.DET.3SG.F to me
 Manner Deixis
 “The girl is walking to me.”
 b. *Devushka* *pod-hodit'* *ko mne.* (ロシア語：到達無 /TWD S/ 場面)
 the girl to-walk.NonDET.3SG.F to me
 Path-Manner Deixis
 “The girl is approaching me.”

ハンガリー語では、到達有場面では過去形の使用が多かった（過去形 66.7%：非過去形 33.3%）が、到達無場面では現在形も同数程度使われている（過去形 48.9%：現在形 51.1%）。特に /TWD S/ 場面では使用頻度が逆転し（過去形 73.3%：現在形 26.7%）、有意差も見られた (Fischer's exact test, $p < .05$)。

- (8) a. *A lány* *ide-jött* *hozzá-m.* (ハンガリー語：到達有 /TWD S/ 場面)
 the girl to.here-come.PST.3SG ALL-1SG.
 Deixis- Deixis Deixis
 “(lit.) The girl came here to me.”
 b. *A lány* *jön felé-m.* (ハンガリー語：到達無 /TWD S/ 場面)
 the girl come.3SG toward-1SG
 Deixis Deixis
 “(lit.) The girl is coming toward me.”

さらに、ロシア語とハンガリー語には（動詞）接頭辞があり、アスペクト的な意味を表す場合があるとされる。ハンガリー語では、到達有場面では動詞接頭辞が使われる（45 例中 37 例）が、到達無場面では使われない傾向（45 例中 24 例）も見られた (Fischer's exact test, $p < .01$)。使われる接辞も、前者では *ide-* 'to.here' / *oda-* 'to.there' であるのに対し、後者で使われた多く見られたのは *el-* 'away' であった。ロシア語では、動詞接頭辞の使用頻度については、到達有場面（60 例中 33 例）と到達無場面（60

⁴ 実際の回答ではバリエーションが見られたため、ここでは「私のところに」「私の元へ」「私の元に」「私に」を『「私のところに」など』とし、「私の方に」「私の方へ」「私の方に向かって」「私の方へ向かって」「こっちに」「こっちへ」「こちらに」「こちらへ」「こっちに向かって」「自分の近くまで」を『「私の方に」など』とまとめた。

例中 34 例) とで違いは見られなかった。使われる接頭辞については、/AWYFRM S/ の場面で *u-* ‘away’ の比率が高くなるが、*pri-* ‘toward’ および *pod(o)-* ‘to’ の使い分けはほとんど見られなかった。

5. まとめ

本研究では、移動事象において、移動物が着点に到達するかしないかによって言語表現に差異があるのか、あるのであればどのような表現形式によるものなのか、また、通言語的にどのような特徴が見られるのかについて、実際の言語使用において検討するために、系統の異なる五つの言語（イタリア語・日本語・英語・ロシア語・ハンガリー語）を対象として言語実験を行い、その結果を分析した。分析の結果、経路主要部表示型言語のイタリア語では、移動物が着点に到達しない事象の表現において、先行研究 (Aske, 1989) で主張されるように、主要部で様態動詞が使われる傾向が見られたが、それはダイクシスが関与しない事象の表現にのみ見られる傾向であり、特定の直示方向への移動の場合には、経路動詞が増加する傾向も見られた。日本語では、着点に到達するかしないかによって複雑述語の前項の動詞選択が異なり、予測に反して、経路動詞の使用率が高くなる傾向が見られた。このように、着点に到達するかしないかによって、表現の類型性が大きく変わる傾向、つまり到達無場面で主動詞における様態表出の増加は見られなかった。

表現形式の選択に関しては、ハンガリー語では移動物が着点に到達するかしないかによって動詞接頭辞の使用頻度、後置詞および格の選択、主動詞のテンスの選択、という様々な側面で大きな違いが見られた。ロシア語では接頭辞の選択に差異が見られ、英語では動詞のテンス・アスペクトに若干の違いが観察された。イタリア語、日本語、英語では、接置詞および格において形式上の区別はあるが、今回の調査においてはその区別は顕著には現れなかった。以上から、移動物が着点に到達するかしないかは言語によって異なる形で表現形式に現れること、またハンガリー語が特にこの区別を重視する傾向があることが分かった。

謝辞

本研究は、国立国語研究所共同研究『空間移動表現の類型論と日本語：ダイクシスに焦点を当てた通言語的実験研究（代表：松本曜）』、JSPS 科研費 15K02753, 16K02808, 15H03206 の助成を受けて行われている。

参考文献

- Aske, J. (1989) Path Predicates in English and Spanish: A Closer Look. In *Proceedings of the Fifteenth Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*. pp. 1-14.
- 江口清子 (2017) 「ハンガリー語の移動表現」『移動表現の類型論』 pp. 39-64, くろしお出版
- Eguchi, K. and Bordilovskaya, A. (2017) A study of the functions of verbal prefixes in Russian and preverbs in Hungarian: An analysis of motion event description. Paper presented at the 14th International Cognitive Linguistics Conference, Tartu University, Estonia.
- Koga, H., Koloskova, Y., Mizuno, M., & Aoki, Y. (2008). Expressions of spatial motion events in English, German, and Russian: With special reference to Japanese. In C. Lamarre, T. Ohori, & T. Morita (Eds.), *Typological studies of the linguistic expression of motion events, Volume II. A contrastive study of Japanese, French, English, Russian, German and Chinese: Norwegian Wood* (pp.13-44). 21st Century COE Program Center for Evolutionary Cognitive Sciences at the University of Tokyo.
- Matsumoto, Y. (2003) Typologies of lexicalization patterns and event integration: Clarifications and reformations. In S. Chiba et al. (Eds.) *Empirical and theoretical investigations into language: A festschrift for Masaru Kajita*, pp.403-418. Tokyo: Kaitakusha. [Reprinted in *Cognitive Linguistics (Critical concepts in linguistics)*, Vol. III, ed. by Adele Goldberg, pp. 422-439. London: Routledge. 2011.]
- 松本曜 (編) (2017) 『移動表現の類型論』くろしお出版.
- Slobin, D. I. (2000). Verbalized events: A dynamic approach to linguistic relativity and determinism. In S. Niemeier & R. Dirven (Eds.), *Evidence for linguistic relativity*. pp.107-138. Amsterdam/ Philadelphia: John Benjamins.
- Sinha, C. and Kuteva, T. (1995) Distributed spatial semantics. *Nordic Journal of Linguistics* 18: pp. 167-199.
- Talmy, L. (1985). Lexicalization patterns: Semantic structure in lexical forms. In T. Shopen (Ed.), *Language typology and syntactic description, Vol.3: Grammatical categories and the lexicon*. pp.57-149. Cambridge: Cambridge University Press.
- Talmy, L. (2000). *Toward a cognitive semantics: Vol. II: Typology and process in concept structuring*. Cambridge, MA: MIT Press.
- 吉成祐子 (2014). 「日本語らしい表現を検証する方法の提案：日本語母語話者と学習者の移動事象記述の比較より」 *Journal CAJLE*, 15, 21-40.